

平成18年度第1回府中市小中一貫教育検討会議 まとめ

平成18年5月19日

第四中学校

1 委員長・副委員長の選出

委員長 広島大学大学院教育学研究科

教授 池野 範 男 先生

副委員長 福山大学人間文化部心理学科

教授 松 田 文 子 先生

(他の委員は委員一覧表に掲載)

2 授業反省(中学1年国語)

授業者：第四中学校 藤原教諭
小学校5・6年の先生と連携して、文学的な文章なので、「読む力」と「根拠を考えながら言える」という2点を課題にして指導案を作成した。

本日の授業については、

入学して1ヶ月ということで、「抵抗なく学習に取り組める」「基本的な文章が読めるようになる」この2点を考えるなかで、北小学校で取組まれている授業展開や、授業スタイル等を指導案に取り入れた。

北小学校と第四中学校の小中一貫した指導方法として、問題解決的学習を取り入れた「7：3の生徒主体の授業づくり」を進めている。

生徒自らが疑問点を幾つか挙げ、しっかり交流する場面を増やし、一つ一つを解決することが、今回の改善点だった。



子ども達は、落ち着いて自分の意見を堂々と表現したと感じた。自分の意見に根拠をつけて述べる力が弱いということだったが、一人一人の読み取りで精一杯表現していた。

国語の授業を、小中で頭をつきあわせて「どう授業を仕組んだらいいのだろうか」「この発問はどうだろう」と研究したのは初

めてだった。

小学校では当たり前なのが、中学校では当たり前でない。中学校では当たり前なのが、小学校ではそうでない等、話をしないと分からないことが、具体的に見えてきた。

指導案を検討して、本日の授業を見ると、自分が授業をしているように見られたし、参考になり自分自身の学習になった。



3 四中校区で進める授業づくり

四中校区の研究主題は、「義務教育9年間の学びを見通した指導の工夫」で、サブタイトルとして、「7：3の授業づくり」としている。

《中学1年アンケートより》

中学校の生活について、小学生の時、不安に思っていた3項目について、入学してその不安はどうなのか3項目について、アンケートをした。

「教科担任制に変わる事」…「変化があって楽しい」「先生に親しみが持てる」

「授業内容が難しくなる」…「今は、理解できる」「宿題が多くて大変」

「先輩と仲良くできるだろうか」…「やさしい」「楽しい」などであった。例年よりも、早い段階から中学校生活になじんでいることがうかがえ、2年前から取り組んでいる小中一貫教育の成果だと考えられる。

《一貫性ある指導法の研究より》

一貫性ある指導法については、平成17年度からは、全教科で取り組んでいる。四中校区の児童・生徒の課題として、「思考を深める」「全員に分かりやすく説明していく」ということがあげられる。課題克服のため、問題解決的な学習を小中学校で、同じスタイルで取り組むようにし、とまどいが少なくなり中学校の授業になじんでいる。



しかし、まだ課題も多くあり、小学校では、自分の考えは出せているが、例えを使ったり、友達と比べたり、深めていく力は十分ではない。

中学校では、全ての教科や単元で、問題解決的な学習を行うことはまだ難しい。生徒に、問題解決的な力がついているかということ、まだ、不十分である。

その問題（指導者側の）を、3点に整理している。

単元の学習前の子どものもっている、見方・考え方・経験などの力を指導者側が、ひとつの授業をつくるうえで、十分把握しているか。

子どもが多様な考えを出しているが、教師側がそれに応えていけているだろうか。私も理科だが、子ども達が、こういう方向で解決していきたいと提示するが、ついつい、今までやってきた経験無理やり落ち着けようとしている傾向はないだろうか。

問題解決的学習ということなので、問題提示・課題設定が大切になってくる。本時の「めあて」の設定がきちんとされているだろうか。子ども達が、自分達で問題が解決できたと思っているか、自分達でやったという、達成感・実感が十分あじわえていないなかで、学習を終了して次の授業に入っている現実はないだろうか。

小中で確認したことは、問題解決的な学習を進めるにあたり、小学校からの学習過程でついている力を把握し、中学校に生かしているか。また、小学校は、前の学年で着けた力に、もっとプラスさせて力を付けているかである。

今回の授業提案は、小学校との連携で、「今の中学校1年生には、こんな力が付いている」「この授業でこの部分をプラスしよう」「この部分は小学校ではまだ付いていないので、中学校で付けていこう」などを狙った授業になっていった。

また、7：3の授業づくりは、中学校側の課題が大きい。中学校の授業は、教師主導で、子ども達は答を言うだけで終わっている。解決していくのではなく、質問に答えて授業が進んでいく、そんな現実はないだろうか。

生徒主体というのは、生徒だけでやっていくのではなくて、指導者側に明確な問題意識と、生徒が自分達で解決していく見通しをもつことが必要である。

最終的には、生徒が自分達でやったという達成感をもてる授業をつくっていくことをめざしている。

もうひとつ、「自学自習の力を付ける家庭学習指導」の研究を進めている。家庭学習を定着させるには、家庭学習を子ども達自身が、「よし、やってやろう。」という積極性を育てることが大切である。しかし、「やろうと思っても、やり方が分からない。」といったこともある。

今年度は「授業だより」のタイトルにある「夢に挑戦」で、子どもにも頑張ってもらいたいということを伝えながら、全ての子どものに配布し、家庭学習のやり



方を指導している。

次に、「進路意識の育成の研究」では、昨年度より取り組んでいる、ピア・サポートの精神を授業や日常に生かしている。

4 協議

小学校の先生と中学校の先生とが、十分検討されていたので、小学校の授業と中学校の授業となりが違うのかと考えながら見ていたが、分からなかった。また、四中から、「例えて言う」とか、「比べて言う」ということが課題だといわれていたが、その部分も検討されての授業だったと思う。

北小学校から、「小学校では、当たり前だと思っていたことが、中学校では違っていた。」ということが検討するなかで出てきたとあったが、どんなことが話し合われたのか。

小中の違いで驚いたのは、「この教科書のページ（P154）から言うと、本来学習される時期は、二学期ではないだろうか。それを、何故、今持ってくるのか」ということである。小学校であれば、少し入れ替えるということはあるが、発達段階を考えたときこのような組み換えは考えられない。

そのことについて質問したが、「今、この教材を使い、自分自身を考えさせたい。」と言う先生の思いがあった。中学校では、「教材は、一年間を通して学ぶのだから、ページに沿って教えるということにこだわらない」という意見であった。

小学校では、新出漢字を積み上げていなかったら、教材はなかなかこなせないというのがあった。また、中学校ではその単元のなかに出る漢字は、既習であろうと新出であろうと全て網羅して学習する等、小学校・中学校で話をするまで、疑問にも思っていなかった。

今日の授業では、一文ずつ音読していたが、音読の仕方も、一文の音読は何年生の段階までで、一段落の音読はいつころからなのか、話し合う必要がある。

今までは、一貫教育といったら、小中の先生が授業をTTで進めるというパ



ターンが多かったので、今日は、どこで小中一貫に関する授業が行われるのか、先生が入ってくるのかと思っていた。授業を見ている時には、分からなかったが、話を聞いていて分かった。

生徒の実態と課題を事前交流し、小・中学校で、問題解決的な学習をされているのだと分かった。一文ずつ読みまわ

していたが、「読み取る力」を付ける課題から考えると、感情を込め、臨場感をもって読みこなせるためには、一文ではできないと思う。

音読から朗読に移行しなくてはいけないと考えている。内容をしっかり読み取ることが大切である。今回は、集中させるということで、一文ずつとした。

文学的な文章の学習に於いて、義務教育9年間でめざす力は「作品の読みを通し、思考力や想像力を養い、人間の生き方や社会などについて考え、自分のものの見方や考え方を深める力」であると考えている。

このあたりが、小学校と中学校の連携であり、学習指導要領をふまえての指導案だと思える。また、小中一貫教育を考えた、指導案の書き方の、ひとつのヒントになったと思う。さらに、指導観についても、「小学校段階でつけた力を生かし、発展させるためにも、中学校では、生徒が主体となる」とあるが、こういったところからも小中での取組みが伝わる。

「深まる授業」そのための「繋がる授業」という視点でみた。学習規律にもあたると思うが、「どうですか」「いいです」という、反応を繰り返すと、先に進めない。先生が入らないで、子ども達が「でも…」「どうして…」と繋げていくと、さらに深まっていくのではないか。

子ども達の深い意見が出ていたが、どことどこがどう繋がっているのか、あそこがこう発展している、こういう見方がある、ということ子ども達が感じる前に、自分の書いたことを読んで満足して終わっているのではないか。

生徒の疑問からの授業なので、生徒が意欲的だった。また、小学校と検討された授業だったので、子ども達の抵抗感はなかったようだ。今日の授業は、子どもと先生がよく繋がり、小中連携と四中校区でされている実践の成果が出ていた。

指導案と授業をみて、中学校で授業研究をしているとは思わなかった。小学校で普段している授業だった。それくらい、小学校と中学校で話をされたと思う。

中学校に上がると、教材の中身が難しくなる。今日の教材は、1年生の後半で習うということだが、語彙や語彙数について、小学校とはかなり違う。中学校に入学してから、子ども達は随分勉強していると感じた。逆に、難しいから、学校だけでは消化しきれないので、家庭学習の重要性についても考えていかななくてはならないと思う。



5 指導・助言

小中の職員間での、ピア・サポート精神が感じられた。そのことが、積み重なり繋がっていき、単元観や指導観に現れていた。そして、指導案が出来たのだと感じた。多くの場合、こういうものは、スローガンになりやすいが、実践に生かされている。繋げるためには、形式的なパターンを使うと繋がらない。



気になったのが、先生が、淡々と授業をするなかで、最後に拍手をしたり、すぐ手をあげたりした子どもに「早いね」の声かけをしていたが、やり方によってはまずいと感じた。

拍手があると反論がしにくいし、反応が早いというのは、必ずしもいいとは限らない。じっくり考えることが大切で、「早い」ということを褒めることはない。

小中連携の成果が見える授業だったと思う。しかし、いつもこのような授業になってはいけない。小学校で、しっかり力をつけて、中学校への連携を大切にしてほしい。

指導案の書き方は、「単元観」に、小中の関連・連携が見えるようにすることが大切である。例えば小学校5・6年生では、「読む力」をどのように培っていなければいけないのか。それを、中学1年生になるとどれぐらいのレベルになるのか。一番いいのは、各学校が学年ごとに目標を設定するのが良い。学年ごとでは難しいとなると、1・2年生の学習目標、3・4年生の学習目標、5・6年生の学習目標、また、中学生に入って、1・2・3年生の学習目標を設定する。また、教科によっても違うので、内容にしたがっての工夫を考えてほしい。

小学校から中学校にかけての能力の育成を図る。小学1年生から中学3年生までの、系統的な段階を踏まえた能力の育成と、子ども達につけたい力を考えていけば、課題の設定ができる。

この教材ひとつひとつを、どういうふうに工夫すれば子ども達の心情にせまれるのか。今日、先生は大切な金の卵を割られたが、どこまで子ども達の体験なり、自分のこととして考えられるのか。もう少し工夫することができたのではないか。

指導案を作る時や、先生が課題を設定する時、もう一步、子ども達が分から

なかった時、どのような手立てをするのかを、考える必要があった。ある一定の能力を子ども達に培いたいとき、一般的には、こういう準備をして問題解決する。「もしかすると、ここでつまづくかもしれない」ということを、幾つか予想しておかなければいけない。

もう一步、踏み込むために、どういうことをすればいいのかを、小学校の授業を中学校の先生が、中学校の授業を小学校の先生がみて、それぞれの、授業スタイルを交流して、できるだけ繋げようとしていると思う。



今日の授業で黒板に、きれいな蝶が貼られていたが、以前の中学校ではなかったと思う。今の授業スタイルを変えたり、また、逆に取り入れなくてはいけないこともある。そういう所もお互いに交流し、授業研究を色々な観点で進めて欲しい。

6 各中学校区小中一貫教育実施計画

<p>第一中学校区（岩谷小・国府小・栗生小・旭小・南小・第一中）</p> <p>研究テーマ：9年間を通して、すべての子の可能性を最大限にのばす指導方法の工夫</p>	
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小中一貫した教育目標、めざす子ども像による学校運営 ・ 9年間の学びを見通した教科指導 ・ 小中合同の異年齢交流や乗り入れ授業の実施
要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小中一貫した生徒指導 ・ 小中一貫した地域や家庭との連携 ・ 小中合同学校行事の開催
<p>第二中学校区（西小・東小・広谷小・岩谷小・第二中）</p> <p>研究テーマ：理論的思考力・表現力の育成</p>	
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小中同じ研究目標での教育研究推進 ・ 小中一貫した生徒指導（「連携七項目」の実践等） ・ 小中合同学校行事の開催（公開研究や挨拶運動等共同開催）
要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 9年間を見通したカリキュラムによる教科等の指導 ・ 行事への相互参加や乗り入れ授業の実施 ・ 9年間の成長を見通しながらの家庭や地域との連携 ・ つながりを大切にしつつも、区切りも大切にした学年学校意識

第三中学校区（明郷小・久佐小・諸田小・第三中）

研究テーマ：学ぶ力 表現する力の育成 ～小中9年間を見通したカリキュラムの編成
と一貫性のある指導法の工夫改善を通して～

概 要	<ul style="list-style-type: none">・ 小・中の乗り入れ授業・ ピア・サポート訓練の導入・ 小学校英語活動の充実・ 小・中の9年間を見通した一貫カリキュラム作成・ 小・中一貫したキャリア発達を促す4能力領域それぞれの視点で系統性を持たせたカリキュラム作成・ 生徒指導にかかわる小・中の取組みの交流・理解・ 教科・特別活動・道徳・総合的な学習の時間、教科外活動等での小・中の児童生徒による異年齢交流の実施・ 指導内容・指導方法の工夫改善・ 公開研究会同日合同開催・ 小・中兼職・ 小・中の9年間を見通した家庭学習指標の作成・ 第三中学校オープンスクールへの参加・ 中学校行事等へ校区小中学校児童の参加
--------	---

第四中学校区（北小・第四中）

研究テーマ：義務教育9年間の学びを見通した指導の工夫 ～7：3の授業づくり～

概 要	<p>小中一貫性ある指導方法についての研究部門 学びでつなく</p> <ul style="list-style-type: none">・ 問題解決型の授業づくり・ 表現力（思考力、判断力）の育成・ 自学自習の力をつける取組み・ 小中兼職教諭による理科授業の研究とカリキュラムの作成 <p>学びへの意欲を高める進路意識の育成についての研究部門 学びに向かう意欲でつなく</p> <ul style="list-style-type: none">・ 小4、中1にピア・サポート訓練の実施・ 学校生活へのピア・サポート精神を取り入れた取組み・ 生活意識調査による児童・生徒の実態把握と指導の継続・ 学び環境ネットワークを基底とした地域の教育力の活用
--------	--

上下中学校区（上下北小・上下南小・上下中）

研究テーマ：元気いっぱいの上っ子「21世紀を担う上っ子の育成」

主体的に学び、自ら考え、表現できる子どもの育成を目指して

～小中9年間を見通したコミュニケーション能力を高める指導のあり方～

概要	カリキュラム委員会
	・ 9年間を見通したカリキュラムの作成
	各研究部会
	「教科指導部会」
	・ 9年間を見通した発達段階に即した効果的な指導のあり方を探ろう ～小中連携を通して～
	「生徒指導部会」
・ 自分の生活を見つめ、自ら考え、行動できる子どもの育成 ～9年間を見通した道徳授業の交流を通して～	
「進路指導部会」	
・ 9年間を見通したキャリア教育の実践に向けた年間指導内容の研究	

7 まとめ

平成20年度より、小中一貫教育の完全実施となる。今年は、「基盤づくり」「準備づくり」「体制づくり」の年だと思う。

基盤づくり かけ橋の日・行事等の取組み・授業研究等継続して、今まで以上の教育力の基盤づくりをお願いしたい。

準備づくり 5教科に絞って府中市のカリキュラムをつくり、小中学校で実践していくための、新たな準備を進めてほしい。

体制づくり 小中学校の一貫としての体制づくりと、学校全体としての、経営・指導・教科・生徒指導・進路指導等全体としての体制づくりをお願いしたい。また、単なる、協力でなく一貫の取組みへと発展させ、各学校、各中学校区、市全体の流れを見通して進めてほしい。